

「北九州にB29が初空襲」体験記

北九州市八幡東区

原田 廉

その前夜は、かなり蒸し暑い夜であった。学校の作業棟に警戒警報で警備隊として、我等生徒の一部が待機していた。灯火管制で薄暗く、筵や縄用の藁束が積んであったせいか、やけに蚊が多く悩まされた記憶が蘇ってくる。

それは、昭和19年6月16日（金曜日）深夜のことであった。（県立小倉園芸学校4年在学中、現小倉南高等学校）

既に昭和18年末には太平洋戦争の戦局は苛烈で、混戦状態になっていた。

夜も更けてまどろむ頃、深夜も午前1時に近かったと思う。突然、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り響き、われ等生徒は急いで各部署の警備についた。そのうちに地上から照空灯の太い光線が何本も交差して、夜空の雲間を這うように敵飛行機を追いつめ、捜し求めている。

ウオーンウオーン、にぶく重苦しい爆音とともに、高空に大型爆撃機（ボーイングB29）らしい悪魔のような機影が写し出された。すかさず高射砲が撃たれ、ズドーン、パッバカーンと炸裂し、煙を残すが届かない。高射機関砲（銃）がダダダッ、ダダアーン ダダダッ、ダダアーンと、5発に1発の曳光弾が光を引いて打ち上げ花火のように美しく飛んでいった。

防空壕に退避して伏せろと指示があったが、皆はまだ爆撃を受けた経験は初めてのことで、その恐ろしさを知らず実感はなかった。むしろ高い所に上り、見物する者さえいた。そのうちにドッカアーン、ドッカアーンと、地響きする爆弾の破裂らしい音も聞こえてきた。

どのくらいの時間が経ってか、（小倉市立）三郎丸国民学校に別動隊として警備に出向いていた先輩生徒の伝令が、急ぎ帰って来て大声で「爆弾でやられた、沢山の人が生き埋めになっている、助けに早く来てくれ」との連絡があった。しばし唾然としたが、気を引き締めて10数名の救援隊がスコップや鍬等を担いで、約1.5km離れている三郎丸の現地へ急行した。

到着してみると、暗夜ゆえ、状況がすぐにはわからなかった。たしか三郎丸国民学校の運動場の裏門近くだったと思う。

当時の防空壕の多くはまだ地下に掘り下げただけの穴で、上部には蓋とか覆いがなかった。爆弾が壕の近くに落下破裂し、上に吹き上がった土砂がまた舞い降りてきて、壕に隠れていた人達を生き埋めにしたとのことであった。

急げ早くも、無我夢中で土砂をスコップ等で取り除いていった。最初の探し出した人はまだ脈があったようだ。誰かが連れて入ったのか、猫が1匹生きていた。それからは体を傷めないように手探りで掘っていった。

手足の指は苦痛で内側にひどく曲がっていた。手首がでてきて、そこを力一杯に引っ張ると、肘も曲がったまま体が動いて出てきた。もう既に硬直状態になっていた。

近くの住民と思われる老若男女の人々を次々に引き上げては担架に乗せて、急いで講堂へと運んで行った。その中には警備に来ていた別動隊の江藤先生と、生徒の安部・池上先輩もいて、

既に爆死の様子であった。ひたすら懸命に10数人を搬出して、少し空が白みかけた頃、若い母親が髪を振り乱してうつぶせになり、乳幼児をかばうようにしっかりと抱きしめている姿が現れてきた。私はその母子を引き上げると同時に、今まで張りつめていた心が胸につまって、どっと涙があふれ出て止まらず、前が見えなくてその後の作業を続けることができなくなった。

朝が来て、講堂に安置されている御遺体は、記憶では18名を数えた。皆で合掌して御冥福をお祈りした。我にかえてみて、その間の空襲の様子はほとんど覚えていなかった。

分担して、自分等何人かは池上先輩の御遺体を足立のお宅まで担架を担いで送っていった。出迎えに走り出てきたおばあちゃんが変わり果てた池上先輩に抱きつき、名前を呼び声をあげて泣いた。皆もすすり泣いた。

現在、この爆死された別動警備隊の3名、教諭や生徒等の「慰霊碑」が小倉南高校の庭に、「被爆殉難の地」記念碑が三郎丸小学校の裏門近くに建立されている。

その翌日6月17日の朝日新聞発表の記事を拾ってみた。

「尊き犠牲者8名、地上部隊に戦死5名重傷3名、我方の損害は極めて軽微なり。八幡製鉄所もまた若干の被害あるもその損害は軽傷僅かに2名」とある。(他の情報では市民の死者210数名、行方不明40名、重軽傷者380名、家屋全壊110軒、半壊250軒の多くにのぼったとなっている。)

なお、「本16日2時頃、シナ方面よりB29及びB24、20機内外が北九州地方に来襲せるも、壮烈なる空中戦闘が展開され、精鋭なる荒鷲及び地上の高射砲部隊により、撃墜7機、撃破3機」とある。(自分も大門の北に炎上墜落機の現場をその日、見に走った。若松にも1機墜落していると聞いた。また別報では、延べ60機の波状攻撃を受けたとなっている)「初めてのシナ大陸米軍基地からの渡洋爆撃。虎の子、超空の要塞ボーイングB29(遠距離大型爆撃機(3機参加と米軍発表)とコンソリデーテッドB24(中型爆撃機)をもって編成してやって来た」

「昨15日には敵機機動部隊はマリアナ諸島サイパンに来襲し上陸。それに父島及び硫黄島をも艦載機数十機が空襲して来た。敵機動部隊の来襲はサイパン上陸、小笠原諸島や、16日の北九州初空襲は相呼応するもので、敵総反攻の一翼をなすものであり、敵の猪突侵攻いよいよ急調――」との文字が並ぶ。

後日、考えて見れば昭和19年6月16日頃を境として、日本本土への執拗な来襲はいよいよ苛烈になっていったようである。

今年は古希祝を迎えるに当り、また戦後50年節目の年。改めて戦争の悲惨さを顧みて、平和の尊さを再確認した。

親から子へ、子から孫へと、わが微力な戦争体験の一部でも後世への参考になればとここに記載した。